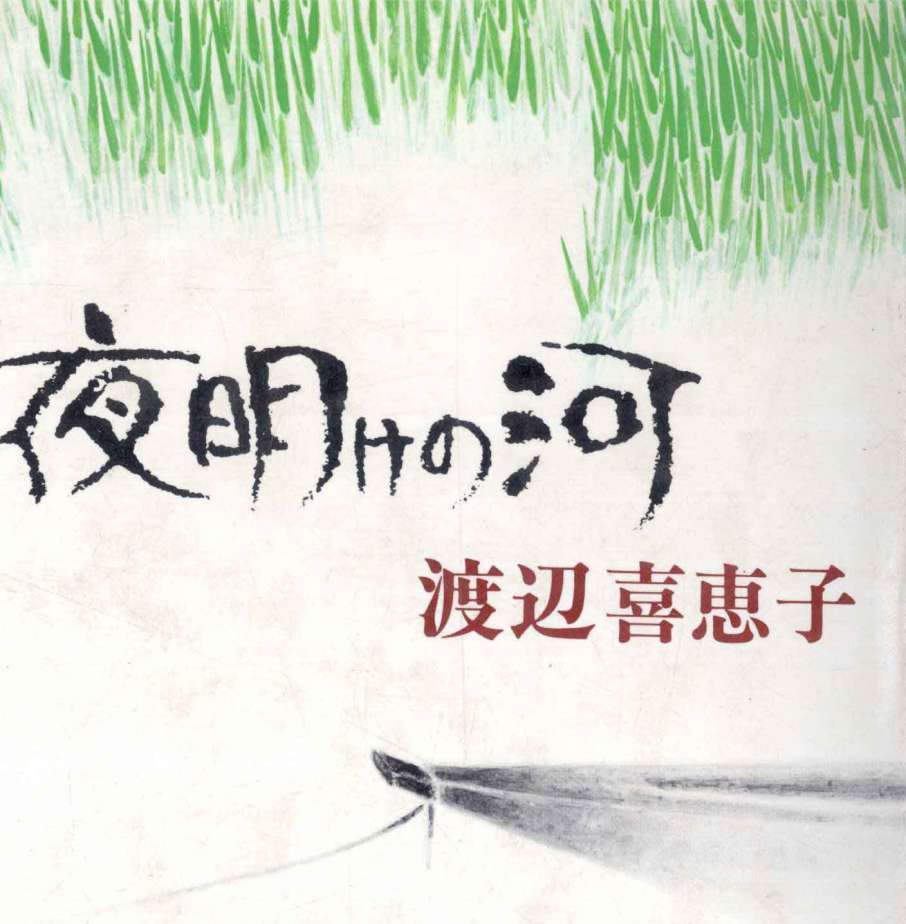
夜明けの河

渡辺喜恵子



新潮社版

夜明けの河

渡辺喜恵子

新潮社

夜明けの河

一九七九年四月一〇日　印刷
一九七九年四月一五日　発行

定　価／九〇〇円
著　者／渡辺喜恵子
発行者／佐藤亮一
印刷所／東洋印刷株式会社
製本所／神田加藤製本株式会社
発行所／株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（03）二六六—五一一一
　　編集部（03）二六六—五四一一
郵便番号　一六二
振替　東京四—八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kieko Watanabe, 1979 Printed in Japan

夜明けの河■目次

南へ突っ走れ　5
秋の曲　46
金沢屋　68
錦の御旗　77
官軍　91
奥羽列藩同盟　112
密書　132
ひとりの一揆　161
罠　175
情っ張り　199

装幀　岡田嘉夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

夜明けの河

南へ突っ走れ

慶応四年閏四月二十日の未明、福島の妓楼金沢屋に於て仙台藩士に捕えられた奥羽鎮撫総督下参謀世良修蔵は、褌一つの素っ裸で寿川（ことぶき）へ引摺り出され、首を斬られた。

寝込みを襲われた世良は、刀を奪われた上に護身用のピストルの弾まで抜かれてしまったから、逃れようにも逃れるすべはなかったのだが、見るも無惨な死に様をしたものである。そのとき世良の敵娼（あいかた）を勤めたのは若葉というまだ年の若い女郎であった。若葉は南部藩の廻し者で、侍の娘だという説がある。

若葉は南部の生れであるが、南部藩の放った密偵だとか、侍のむすめ説は間違いで本名はみさといった。

陸中宮古の近くの入山村の生れである。

みさの母のさよは閉伊（へい）街道に沿った千徳村の郷士の娘で十四歳の春に盛岡のお城へ奉公に上り、

油御前と称された妙白尼様のお端下女として仕えているうちに、相ついで両親を失い、弘化四年に妙白尼様がこの世を去ると暇が出て千徳村へ帰り、入山村の百姓、田頭久兵衛の許へ後妻として嫁いだ。

翌年、みさを産んだ。

田頭家は山持で、かなりの田畑を持った長百姓であったが、先妻の産んだ子が四人、姑に大姑もいる大家族であった。久兵衛は四十二歳、娘達は片付いていたが、長男の久太郎は嫁を貰ったばかりで、さよは後添いだからというのであろうか、奥座敷の久兵衛の寝所へ一緒に休むことは許されなかった。枕を持って通えと、姑のきんが命じたからである。生活の実権は、六十を過ぎたこの中祖母のきんが握っていた。

息子の久太郎と五つしか歳の違わぬ若い継母のさよは六つ違いの息子嫁と同格に扱われた。

久太郎の嫁は吉里吉里村の、漁師の娘だった。息子も孫も百姓家に不向きな嫁を撰んだと、きんはよく愚痴をこぼし、わけてもさよの御殿ふうを嫌った。

さよにすれば格別上品ぶっているわけではないのだが、長い間の御殿奉公が身について、言葉使いの丁寧すぎるのも、きんは気にくわない。馬鹿にされたと思うのかいちいち目くじらを立てた。

「利だふりこいでェ」

朝起きると髪を梳くのも、農家の嫁には過ぎたことだという。寝乱れた髪は手拭いで縛りつけ、一刻も早く田畑へ出ろ。お天日さまが待っているぞと言う。

きんは、九戸の普代村から嫁に来たが、実家も山持で、少しは寺子屋にも通ったほどで読み書きは出来たし、頭のいい女だった。一度教わったことは絶対に忘れないというのが自慢で、人間なら誰でもそうあるのが当然だと信じ込んでいる。だから、そうでない人間はみな怠け者に見えるのだ。頭を使わないのは不精者だという。活きた歴史はすべて諳じ、南部の領主は代々馬鹿殿様ばかりだと吐き捨てるように毒づく。さよへの面当であった。

朝は太陽の昇らぬうちに起き出し、夜は夜で松明りを焚いて夜なべ仕事に励む。縄を一夜に八束も綯い、草履だ草鞋だ爪籠（雪靴）だと、家内中の履物づくりに懸命であった。作りすぎたら売りに行けばいい。だが嫁達は六十歳のきんの三分の一も働けず、夜中にずきずき腕が痛んで眠れずに朝を迎えた。

「そんただざまでヘラ渡し（主婦権譲り）が出来ると思うのか」

と、きんの叱声が飛ぶ。

度々この地を襲う饑饉の怖しさを身にしみてきんは知っているのだ。饑渇に備えてせっせと金を溜め、食糧を貯えなければならない。飢えの怖しさを繰り返し繰り返し嫁達に語った。

「祭りが来ようが、盆が来ようが雨ばかり降って、饑渇ほど怖しいものは無えのし、閉伊の岬に魔靄という霧が嵐と一緒に吹き込んでくる年は、お天日さまも顔を出さねェのし、夏も綿入れを着て、田植えどころか、芋に大根にソバ粉をまぜて雑炊ばかり食って暮すのせ。蕨の根も野老も掘り尽し、貯えのなくなった者から、次々に死んでゆくのでがんすだ」

きんの知る限り、凶作は一年で終った試しがない。必ずその翌年も、またその翌くる年も地べ

たの冷えで不作がつづく。冷えた海に魚は寄って来ず、苛税に苦しむ百姓が怒りを爆発させて一揆を起す。北から南へ土煙りを巻き上げて走り出す一揆こそ、日頃は借りて来た猫のようにおとなしい農民の、生死を賭けた戦さなのだ。

彼等が怒り出すと、お代官さまも御給人さまも、もう怖れの対象でなくなるのだ。一家一村、親も子も、食糧が尽きれば死ぬるか生きるか道は一つしかない。

文政八年、南部藩を襲った凶作は本田新田高二十四万八千石のうち、損毛高十五万七千石にものぼっている。天保三年の損毛高は十五万五千石、それなのに藩は何をした。この年の十二月、幕府の上野位牌所やその他の建築工事費として三万両もの献金を願い出ているではないか、なんたる悪政だ。収穫皆無の百姓に対し一年間の租税延納を許可したほどだから、藩の財政は決して豊かではないのだ。凡てを借金でまかなう献金だった。その償却方法として、翌年五月には五十石以上の諸士に対し、三年間の期限つきで一両から四両の借上金を命じている。

天保四年も凶作、損毛高二十二万三千石。まったくの無収穫である。諸士の給与も三分の一に減らされた。

餓死者、行き倒れが道にあふれ、救済小屋を建てて窮民を収容したが、天保五年、六年と凶作はなおも続き、七年の凶作はまたしても損毛高二十三万二千石という数字を出している。

だが、派手好みの南部の殿様の奢侈は一向に止むふうもなく、城内大奥に広壮な建築を始めた。三階の居間に長生楼と名づけ、それだけではあき足らず、城外の邸宅を壊してはやれ広小路御殿の、清水御殿のと、再々の建築造営に取りかかり、大沢河原の菜園まで潰して遊園地づくりであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

る。飢じさに耐え兼ねて死んでゆく領民を尻目に遊園地には馬場あり、馬見所あり、やれ泉水を作れの、茶屋がなくてはならないのと、その泉水の流れも曲水の趣があってこそ面白いのだとか、茶屋は曲水の茶屋がいいなどと御託を並べ、これで満足ということがないのだ。まこと農婦きんのいうとおり、まったくの馬鹿殿ぶりであった。馬鹿殿様は、三十四代南部利雄公の孫で、油御前の産んだ利済である。

利済公は寛政九年に盛岡で生れ、幼名を源太丸といった。父は狂気の若殿といわれた利謹である。父利謹の亡くなった翌月、十七歳で剃髪したが、六年目に還俗し、二十八歳で南部三十八代を継ぐといった数奇な運命の人であった。父に似、母に似て暴慢な性格であったのかもしれない。遊園地が完成すると、津志田に遊廓を新設した。津志田は盛岡郊外だが、盛岡への出入口である。江戸吉原を真似、そっくりそのまま土手八丁までつくらせた。人々は眼を瞠って呆れ、その費用の莫大さに驚いた。勘定奉行は御算方、徒目付、同心を引き連れて各地へ出張し、百姓、商人に関わらず富める者には片っ端から御用金を命じた。異議申立る者があれば直ちに家内を親類に引き取らせ、土蔵の在品から帳簿の出入り調査をやり、上納困難の口実を与えないやり方で巻き上げる。

領民は土中の虫けらも同様であった。暴動の起るのを怖れた寺社奉行は再々の意見書を提出しているが、屁とも感じないのだ。

怒りの百姓一揆は野火のように燃え上り、再三に渡って法螺貝を吹き鳴しては盛岡城へ迫った。城門は固く閉されて石を投げても藩主の耳には届かない。徒党を組んで闘いながら農民は権力に

組み伏せられる。
こうなれば最後の手段だ。隣藩へ訴え出るぞと、農民は叫ぶ。
怨みはついに家老花輪栄を失脚させ、勘定奉行江刈内官治の職を奪ったが、悪政は原因を断たねば止むわけがないのだ。翌九年も天候不順で八月半ばに大霜が降り、損毛高二十三万八千石の大凶作となった。
「お前等御殿暮しの者には、饑饉の苦しみなど、なんぼ喋って聴かせても殿様と同じで、なんもわがんねのし」
きんは憎悪に光る眼で嫁のさよを睨みつける。
「わし等には米のお飯ンまなど、盆が来ても祭が来ても口さ入ったことなどねェ」
実らぬ稲穂を田圃へ叩きつけて泣いた暗い歳月をきんは振り返り振り返り、あの年もこの年もと、はては乳が出なくて死なせてしまった子の年まで、いま現在生きていたらなんぼなんぼになった筈だと数え上げ、生き残った己の身を責めるかのように働きつづけるのだ。
「爺さまも意地なしよな、腹病んで死んでしまって——」
稗、大根の雑炊で精も根も尽き果てた男達はみな死んで逝った。
海草をひろいに浜へ出れば籠へ入れた棄児が小さいこぶしを震わせて、海ネコのような声で泣いていた。
捨ててゆく親も惨いが、ひろってくれる人はどこにもいなかった。飢えて道端に斃れていても助けてやろうとする者は誰もいないのだ。みな面をそむけて通り過ぎた。

あの饑渇ではなァー、どうしようも無ェだものなァー。
辛い思い出を同じ言葉で何度でも繰り返す。念仏を唱えるように、きんはぼそぼそと縄を綯う手も休めず毎夜のように嫁達に語りつづけた。
「食うものも食えずに死んだ人のことを思えば、豆も小豆も、一粒たりと粗末には出来ねェのし」
息子の嫁も、孫嫁もおびえたように手を休め、姑の方をちらちらっと見る。
「手は休めずとも、耳は聴えるべァに」
きんの語りはねばっこい。あらゆる記憶をその白髪頭から引出してはえんえんと、怨みつらみで積み重ねる。さよはどう相槌を打てばいいのか、下手に嘴をさし挟むと、御殿奉公に何がわかってと、忽ちやり込められてしまう。二言目には、百姓は呑まず食わずで子を養って来たんだぞと睨み据えられて身が縮んでしまうのだ。
「お城では、百姓から身ぐるみ剝いで旨いものをたらふく食うて、どいつもこいつもどっぷくれているなだべなァ、坊主上りの殿様がなっし」
さよに暇が出てお城を下った弘化四年の十一月にも、野田通りの百姓は暮しがたたず強訴を企てた。小本村の弥五兵衛という者が指導者になって、南へ突っ走ったのだ。宮古、大槌付近の半農半漁の者達もそれに加わった。法螺貝と鬨の声に誘われたのであろう。走りつづける黒い影を追って鎌を手に手に、女子供まで南へ南へと走った。
天保十四年から軒別役五ヶ年の年限つきで新税が賦課され、一軒について一貫八百文が規定であった。貧民は半軒分でもいいとされたが、それは表向きのことで実際には、少しでもゆとりが

あるとわかれば二軒分三軒分、十軒分も二十軒分も取り立てられた。富裕と認められた者は、百軒分、二百軒分と容赦なく取り立てた。肝煎、老名、検断の認定だから異議申立など許される筈もなく、その代り、軒別役五ヶ年上納中は他の御用金は一切納めなくともいいとの公約が出る。にも関わらず、公約は無視され、年間、二度三度、多い年には四度も御用金繰合せを命じた。期限が来ても利息も担保品も引き渡さないという悪どいやり方で、それが厭なら御用金をとなる。

数人の同心を派遣し、督促は厳重で、少しでももたつくことを許さぬ仕組であった。同心に対しては、賄つき一日二百文の日当を支払うのも村々の分担で、役人というものは真実酷い存在である。秋の終りにはまたまた領内一般に対し五万二千五百両もの御用金が命じられた。

十一月十五日より、十二月二十日までの間に五度に納付すべしというおふれで、御用金を命じられた方はたまったものではない。

藩の財政困難はいまに始ったことではないが、大阪の豪商に借りた金が返せず四苦八苦、どうあっても領内から搾き集めるしかないのだ。殺してならず、生かしてならずの領民は苦しさのあまり怒りを爆発させて、野田通りの農民三百人が先ず大蘆野に集結した。

その夜は野宿。十一月二十五日に宮古へ向い、入山村にも知らせが入った。

乙茂、袰野、中里、小本、摂待と次第に人数が増してその数は凡そ二千人に達した。

此の度の御用金はとうてい上納出来ぬゆえ、来年まで待ってほしい。その間、仙台領へ出稼ぎにゆき金を拵えて来ると二千人の農民が宮古の代官所へ駆け込み訴えをやったが受け付けて貰えなかった。受けつけて貰えないのは、はじめからわかっていたが、厭がらせ半分、やってみただ

けのことである。第二の手段として、予定どおり、夕刻を待って法螺貝を吹き鳴らして暴れ廻った。

本町の若狭屋という酒屋に乱入し、家屋土蔵を木っ端微塵に叩き壊した。

宮古と鍬ヶ崎の二ヶ所に宿を取り、訴えを取り上げて貰うまで居据わる構えである。頑強に抵抗した。若狭屋はかねてから無慈悲で聴えた商人で、そっちへ同情する者は誰もいなかったが、土足で町家へ押し込むように宿を求めた百姓の不作法を咎める町人方との諍いから混乱は次第に大きくなり、一揆は二十六日にようやく腰を上げ大槌方面へ向った。

入山村のきんも村人数人とその一行に加わった。

女だてらにと、息子の久兵衛は止めにかかったが、きんは承知しない。幾許かの食糧を背負い、腰に使い馴れた鎌を差し、草鞋の替も持った。

「わが身さえ食えればいいという時代ではないのだ。お前の爺さまは入山村の庄屋どんであったことを忘れるでねえよ」

妻を亡くした息子に後添えも入ったし、孫息子にも嫁が来た。気懸りなのは老いて役に立たなくなった大姑だけである。だが、この姑の死ぬのを待っているわけにはゆかない。麻の短着にも引きをはき、頬被ぶりをして一揆に加わると男か女かわからない。気丈なきんは、六十になってもまだ足腰がしゃんとしていた。怪我人が出たら看護をしてやるのだと、白布一反と焼酎も持参した。手首に数珠を掛けたのは死をも辞さぬ意気込みだった。何度も振り返って村を出て行ったのだ。

宮古川の渡し船に停止命令が出て渡して貰えない。仕方なく上流の浅瀬を渡る者や、海岸へ出て下流を船で横切る者、鍬ヶ崎からそのまま、海路をとる者もいた。きんは勝手知った村人の案内で川上に行き、下半身を脱いで浅瀬を渡った。どんな手段で行く手をはばまれようと、もう南へ突っ走るしかない。

磯鶏、金浜、津軽石でまた同志が増え、二十七日は山田泊り。人数が増えすぎたので山田からは二手に別れて山越えと本街道を海沿いに、大槌へ入る。誰も、何も喋らなくなった。ただひたひたとつづく足音を耳に、己の足だけを瞶めて走った。

街道筋のあちこちで、木蔭に身を隠し一揆に加わろうと、ひそかに待ち受ける人影があとを断たず、もう南部藩役人の手に負えないものとなっている。平田番所を厳重に固めた。

平田番所は仙台領への出入口である。農民があくまでも国境を越えるとあらば斬り捨てよとの命令が出たのだ。

何千人もの人間をどうやって斬るのだろう。警備の徒士同心の方がおびえた。だが農民は役人の臆病を嘲笑うように釜石を避け、大槌から笛吹峠を越えて遠野郷を目指して走った。旋風のように素早い行動である。

笛吹峠を一気に降りて、二十九日の早朝には遠野郷の入口を流れる早瀬川の岸まで詰寄せた。

夜明けとともに法螺貝を吹き鳴し、士気を整え、川原に集まったその数は凡そ一万二千人。

遠野藩主南部弥六郎の重臣、新田小十郎は諸役人を指揮して必死で説得にかかった。秋はすでに深く、早瀬川原は霜で真白だ。草鞋は破れ、素足で立つ農民の足は紫に腫れ上っている。じっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.